

博士学位論文審査要旨

2013年12月24日

論文題目：ブルトンの芸術論とルヴェルディのリリスム概念

学位申請者：宇多 瞳

審査委員：

主査：文学研究科 教授 岡林 洋

副査：文学研究科 教授 越前 俊也

副査：大阪大学大学院文学研究科 教授 上倉 庸敬

要 旨：

シュルレアリスム研究はこれまで思想史的観点からの研究が多く行われてきた。それに対して、本論文はブルトンのテキストを芸術論として読む可能性を提示している。その際に注目されたのが二〇世紀初頭におけるリリスム (lyrisme、抒情) 概念である。ブルトンの『失われた足跡』や『シュルレアリスム宣言』を読み解くと、詩的な情感や詩人の感情吐露といった従来の辞書的理解とは全く異なる意味がリリスム概念に付与されていることが明らかになる。従来の研究は、シュルレアリスム美術の「風変わり」で幻想的な雰囲気とブルトンの著作のテキスト内容を直接結び付ける傾向が強かった。それゆえ、ブルトンがリリスムについておこなっている主張もそうした特異な概念として看過されてきた。また、リリスム概念自体、芸術論史においてこれまでほとんど取り上げられることがなかった。

それに対して本論文は、フランス文学研究者 J=M・モルポワらによって行われているリリスムを再考する研究動向に注目し、それに基づいてブルトンやその前後のアヴァンギャルドのリリスム論の再解釈を試みている。さらにブルトンより前の世代の詩人で、これまで芸術論史においてほとんど取り上げられることのなかったピエール・ルヴェルディの詩とリリスム論にポストモダンの先駆けともいえる「対話性」と「脱主体性」が見出されることを発見している。

まず第一部 I 「ブルトンの文学理論の絵画論への適用過程—シュルレアリスムにおける詩と絵画の関係—」において、シュルレアリスムの雑誌分析によって同運動における詩と絵画、文学と美術の相関関係が論じられ、次に II 「〈誰のものでもない都市〉—ブルトン『ナジャ』とサリニョンの精神分析的都市論—」では、ブルトンの「オートフィクション (自伝的虚構)」である『ナジャ』が都市論と繋ぎ合わされて考察されている。III 「シュルレアリスムにおける他者観」では、シュルレアリスムにおける「他者」の問題が論じられている。本論文の主たるテーマであるリリスムの問題は次の第二部で扱われている。まず IV 「ブルトンの小説と芸術論におけるリリスム概念の解明」において、伝統的な抒情詩が聴覚性を持っていたこと、それに対してシュルレアリスムのそれには視覚的傾向が見出されることが論じられる。次に、V 「シュルレアリスムにおけるリリスムの問題について—K・グラントの論考を基に—」と VI 「ポエジーとリリスム概念の変容—文学・絵画の境界なき時代における批評理論—」では、ポエジー概念とリリスム概念の変容が先行研究に基づく一次資料の読解によってたどられている。そして VII 「二〇世紀初頭フランスにおけるリリスム概念とその現代的意義—J=M・モルポワの対話的リリスム概念によるアヴァンギャルド再考—」では、詩人の自己表出や感情吐露とみなされてきたリリスム概念に新たな光が当たる。その際のリリスム概念の新解釈の理論的支柱になるのが、モルポワらの論考であり、そこではロマン主義的な「個人的」な感情吐露の次元からのリリスム概念の理解の限界が示され、「人称的」なもの (つまり「私」と「きみ」との対話、自己と他者の相互的なもの) を本質とす

るリリスム概念の存在が浮き彫りになる。本論文は、モルポワの研究に基づきながら、ルヴェルディのリリスム概念のなかに「脱主体性」の契機が存在することを見事に論証している。1920年代、従来の自己表出的な「詩的主体」は極小化されて行くが、リリスム概念がそうであるように、それは自己の向かう方向を他者の世界へと反転させた姿で残っているという極めて興味深い結論が導かれる。

本論文は、リリスム概念の従来的な理解ではなく、その見直しに焦点を当てようとするものであり、最新の研究を踏まえて二〇世紀初頭のフランス語の一次資料を精読し考察しており、その着眼点の新鮮さにおいて特筆すべきものがある。これまでのシュルレアリスム研究に一石を投じた本論文は、今後のリリスム研究の基礎にもなるものと高く評価できる。申請者の研究の開始時点ではリリスムの再考という本論文の要点がまだ精確に把握しきれておらず、また研究の最終段階において重要な研究書や一次資料が多数発見・刊行され議論のやり直しや重複が少なからず見られるが、そうした点を整理しさらに研究を展開できれば大きな成果となることが期待される。地道な一次資料研究に正面から取り組み、米仏の研究書を幅広く渉猟することによってその理論的解析を行い研究論文へと仕上げた本論文には、学位申請者の研究者としての資質と将来性が十分に示されている。よって、本論文を博士（芸術学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2013年12月24日

論文題目：ブルトンの芸術論とルヴェルディのリリズム概念

学位申請者：宇多 瞳

審査委員：

主査：文学研究科 教授 岡林 洋

副査：文学研究科 教授 越前 俊也

副査：大阪大学大学院文学研究科 教授 上倉 庸敬

要 旨：

上記審査委員3名は、2013年12月23日14時から徳照館第1共同利用室において約2時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。学位申請者は、審査委員から本論文に関わるさまざまな質疑に応答し、フランスの近現代の芸術論史の分野での学力を証明した。また語学（英語とフランス語）においても十分な学力を有することが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：ブルトンの芸術論とルヴェルディのリリズム概念
氏名：宇多 瞳

要 旨：

シュルレアリスムを思想的観点から再考する試みは、これまでも先行研究において行われてきた。それに対して本論は、ピエール・ルヴェルディやル・コルビュジエらアヴァンギャルドの芸術論と比較することによって、アンドレ・ブルトンのシュルレアリスム理論を芸術論史の流れの中に位置づける。特に、これまで芸術論史においてほとんど論じられて来なかったリリズム概念に焦点をあて、ルヴェルディとブルトンのシュルレアリスム理論の考察を通してリリズム概念そのもののメカニズムの解明を試みた。それまで中心であった叙事詩・劇詩に代わって抒情詩（ポエジー・リリック）が主流となった一九世紀以降に成立したとされるリリズム概念は、長い間、詩人の個人的な感情表出というロマン主義的な文脈で一面的に捉えられ、議論の俎上に乗せられてこなかったが、近年になって J=M・モルポワをはじめとする研究者らによってその再考が行われるようになった。そこでは、近代抒情詩における詩的主体の問題や声の問題などの、リリズム概念に本来内包される幅広い問題が指摘されている。本論はそうした最新の研究を踏まえて、二〇世紀初頭のフランス・アヴァンギャルドにおけるリリズム概念を捉え直す試みである。

本論は、従来の主観主義的あるいはロマン主義的な抒情詩理解からの脱却の必要性という、1980年代末以降になってようやくフランスの研究者らによって指摘されはじめた主張が、基本的な点において全く変わることなく、ルヴェルディのリリズム論によって二〇世紀初頭にすでに行われていることを明らかにする。ブルトンの『シュルレアリスム第一宣言』においてシュルレアリスムのオートマティスム理論が提示される際に、ルヴェルディのリリズム論（イマージュ論）がステップとして重要な役割を担っている。それにもかかわらず、これまでの研究はルヴェルディをブルトンよりひとつ前の世代の理論家として退け、ブルトンにシュルレアリスム運動の立役者としての地位を与えてきた。本論は、いわば等閑視されてきたルヴェルディのリリズム論の先駆性を指摘し、ルヴェルディの抒情詩において目指されているものが、従来考えられているような詩人の内面の表明ではなく、モルポワの指摘するリリズムの「対話的性質」であることを明らかにする。また、本論によって、ブルトンの芸術論をリリズムの展開として読むことが可能であることが示される。

まず、第一部 I 「ブルトンの文学理論の絵画論への適用過程——シュルレアリスムにおける詩と絵画の関係——」では、初期のシュルレアリスムの雑誌『リテラチュール』誌の概要を示し、同誌のなかで他の文献からの引用が数多く行われていることを示し、それがシュルレアリスム絵画におけるイメージの引用という、シュルレアリスムのコラージュ的性質に重ね合わされることを指摘した。この論は、詩と絵画、文学と美術の相関関係を考察する第二部の問題設定に接続される。II 「〈誰のものでもない都市〉——ブルトン『ナジャ』とサリニョンの精神分析的都市論——」では、ベルナール・サリニョンの精神分析的都市論を読み解き、それをブルトンの「オートフィクション（自伝的虚構）」である『ナジャ』の分析に応用することを試みた。サリニョンの都市・建築論は、簡潔に内容を述べるならば「都市の精神分析」であり、ラカンの精神分析学の流れを汲む。たとえば、ラカンの『セミネール』第7巻においてパツラーディオの建築における「空虚」vide が論じられる。古代ギリシア都市をモデルとして、都市をひとりの人間のように考え、産出され、成長し、絶えず変化するものとして扱うサリニョンの都市・建築論においてもまた、建物だけでなく通りや広場、空き地や都市の外郭を含む全体がひとつの建築物として捉えら

れている。それを踏まえて、本論では『ナジャ』において近代都市パリが、増殖・拡大し空白を埋め尽くす建物ではなく、街路や広場といった空虚を内包する空間によって表象されていることを指摘した。III「シュルレアリスムにおける他者観」では、「他者」を倫理的な文脈や文化人類学的文脈など様々な観点から捉え直し、「他者」の概念を軸にシュルレアリスムを理解することを試みた。「他者」の問題は、リリスム概念における主体の在り方を考察する上でも当然避けて通ることの出来ない概念であり、シュルレアリスムが様々な意味で「他者」への眼差しを保持し続けたことは、リリスムがシュルレアリスム理論の中核に置かれていることとも無関係ではない。

第二部では、まずIV「ブルトンの小説と芸術論におけるリリスム概念の解明」において、E・シュタイガーが伝統的な抒情詩を聴覚性に結び付けて定義するのに対して、ブルトンの前世代に属するマラルメの抒情詩が視覚性を重視しており、ブルトンのリリスムにはそのどちらとも異なる特殊な性質、すなわち社会運動を志向する性質が見られると指摘した。シュルレアリスムがひとつの「集団的経験」として体験される性質を持っていたことは先行研究がすでに指摘する通りであり、ブルトンのリリスム概念もまた、個人の内部で完結するのではない社会性を持っていると結論付けた。

次に、ブルトンがオートマティスムを構想し実践する前段階、シュルレアリスムの黎明期に、ポエジーとリリスムの両概念がアヴァンギャルド全体を巻き込む議論の対象となっており、そこでルヴェルディが1910年代から20年代に一連のリリスム論を発表し、シュルレアリスム理論に影響を与えたことを再発見した米国の研究者K・グラントの先行研究を取り上げた。まず、V「シュルレアリスムにおけるリリスムの問題について——K・グラントの論考を基に——」において、シュルレアリスムの理論形成期におけるエスプリー・ヌーヴォーとの相補的関係を論じ、シュルレアリスムをモダンアートからの逸脱とみなす通説に疑問を投げかけたグラントの論考を紹介した。さらに、VI「ポエジーとリリスム概念の変容——文学・絵画の境界なき時代における批評理論——」では、グラントの研究を展開する形で、デイドロ、ボードレー、デルメ、ルヴェルディの芸術批評におけるポエジーとリリスム概念の変容をたどり、ルヴェルディが主張した新たなリリスムが、二つの隔たった語の組み合わせによって生じるイメージを意味し、響きの良い旋律にたとえられるような従来のリリスムが否定されていることを論じた。

近代抒情詩においては、瀧口修造が語ったように、詩が聴覚的なものから視覚的なものとなり、詩と絵画を別個にではなく融合したものとして捉えるようになったという時代状況の転換があると従来指摘されてきた。グラントの論もまた、シュルレアリスムがポエジーとリリスムの視覚的具現化であるという見解を示すものであった。これは、リリスム概念を語とイメージの相関関係、文学と絵画の相互接近、二つの領域の行き来を示す詩画一致論に帰着させる従来の理解に従っていると言える。しかしながら、こうした文脈ではルヴェルディのリリスム論を正確には理解できない。

それに対して、VII「二〇世紀初頭フランスにおけるリリスム概念とその現代的意義——J=M・モルポワの対話的リリスム概念によるアヴァンギャルド再考——」では、フランス近代詩の研究者J=M・モルポワらによる最近のリリスム研究を参照し、近代詩におけるリリスム概念が持つ意味の広がりや、ルヴェルディの詩作や彼のリリスム論のなかに見出せることを指摘する。本章では、リリスムが従来考えられていたジャンル融合的な議論で理解されていたのではなく、別の新たな芸術表現の契機を担っていたと考える。モルポワ、ドミニク・コンブ、マルティヌ・プロダらによるいくつかの論考において、彼らは詩的主体や、詩的言明の概念をキーワードにして、詩人の自己表出や感情吐露とみなされてきたリリスム概念の再考を行っている。『リリスムについて』Du Lyrismeを著したモルポワは、ロマン主義的なリリスムの概念理解の限界を示し、リリスムを「個人的」personnelな感情吐露ではなく、「人称的」personnelなもの、つまり「私」と「きみ」との対話、自己と他者の相互的なものであるとする。この観点からアヴァンギャルドの見直しを試みると、ルヴェルディのリリスム論では詩のスタイル、フォルムの問題としての新

たなりリズム概念が考えられ、自己以外の声に耳を傾けることによって自己を確立するという現代性が抒情詩の役割として与えられていることが明らかになる。

それに対してル・コルビュジエが『今日の建築』や『ユルバニスム』においてロシア構成主義に見出したとするリズムは、声の調子やエネルギー、あるいは主体の身振りの問題として考えられる。二〇世紀以降におけるリズム概念は、もはや詩人に特権化されたものではなく、また感情の激しい吐露という意味を必ずしも持たないのである。アヴァンギャルドにおいて、主体、あるいはフィギュール概念が依然として彼らの芸術観の中心にいる。しかし、自己を表出させるという主観主義的な主体は矮小化され、あるいは枠のなかに閉じ込められ、反転させたような姿で残っているのだと言える。

また本論では、「詩におけるイマージュ」と「絵画におけるイマージュ」が同じものと考えられていること、そしてリズムが、シュルレアリスム絵画やデッサンの流れるような線描や、あるいは「甘美な死骸」のような思いがけないイマージュの接触、戦後のアブストラクション・リック（抒情的抽象）の絵画といった多様な形で造形化されていることを指摘した。